

ミステリ読書案内

2023. 1. 27 発行元

第441号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

鴨崎暖炉「密室狂乱時代の殺人」

12月に宝島社文庫から鴨崎暖炉の『密室狂乱時代の殺人 絶海の孤島と七つのトリック』が出た。デビュー作の『密室黄金時代の殺人』にもびっくりさせられたが、本作は更に進歩した印象を受けた。お薦めの本。

今度は「孤島」の設定

前作『密室黄金時代の殺人 雪の館と六つのトリック』を取り上げて紹介した時に、「これでは次作を考えるの大変だろう」と書いたが、この作者は苦もなくクリアして見せた。これはすごい！ たいしたものだと思わせられる。

今回は「雪の館」。今回は「孤島の館」。どちらも舞台そのものが密室で構成され、更に本作ではクリスティの『そして誰もいなくなった』を踏まえて、十匹のウサギの人形が用意されている。そして、密室殺人を請け負う『密室全覧』という謎の人物まで登場してくる。

「密室トリックゲーム」

神奈川県の中合にある金網島。島全体を30メートルのフェンスが取り囲み、振動センサーが備え付けられていて、上方は監視カメラが見張っているという。日本有数の大富豪・大富ヶ原蒼大依の所有で、「密室トリックゲーム」を開催するので、各地から密室に関わりある人物が

招待されることになったという。

語り手は前作からの繋がりでも高校三年生の葛白香澄。そして、重要な役割を果たす同級生の蜜村漆璃。そして探偵らしき人物たち。誰もが一癖も二癖もあるような人ばかりで、ととてもとても仲良くという雰囲気にはならない。

最初はゲームらしく、カードを引いて「犯人役」を決め、密室を作らせて、皆で正解を考えるまともな動きだったのだが…。途中から、本物の殺人が連続して起こり、ガタガタと異常事態に陥っていく。殺された現場には「密室全覧」の札のついたウサギの人形が…。

思いもしない大がかりな…

「七つのトリック」となっているが、それ以上にトリックだらけの印象が残る。よくこれだけのトリックを並べることができたものだと感心する。非常にすっきりしたものもあれば、予想もできない、ちょっとありえそうにもないトリックも出てくる。読む側も、「そういうものだ」と納得の上で読んでいたので、

注目の「宝島社文庫」

いろいろな出版社の文庫が出ているけれども、今一番勢いがあるように見えるのが宝島社文庫。私がいつも行く新刊書店ではライト系に近いところに並べられていて若者向けに見えるが、面白さを追求した意欲作が多い気がする。『このミステリーがすごい！大賞』も軌道に乗ってきたように見受けられる。少し前のところでは吉川英梨とか山本巧次がおり、新しいところでは新川帆立などが目を引く存在になっている。

「現実味」の部分は気にしないで楽しむ。「すごいことを考えたなあ」というものばかり。

密室以外の要素にも仕掛けが…

この物語、かなり複雑に作られている。密室以外にもいろんな仕掛けがあって、プロローグに当たる部分にもミスディレクション風のものが隠されている。直接の動機については説明されているけれども、登場人物の隠された秘密の一部は次の作品へ持ち越しになっているようだ。作者はこの調子で次作を構想しているのだと思うが、トリックが種切れにならないかと心配になる。次作をまた期待して…。

麻見和史「魔弾の標的 警視庁捜査一課十一係」

12月に講談社ノ

ベルスから出た本。間に塔子の教育係の鷹野秀昭が公安分析班に加わって捜査する『邪神の天秤』と『偽神の審判』の二冊が挟まったので『捜査一課十一係』としては2年ぶりの新刊ということになる。今回、如月塔子は鷹野ではなく、門脇警部補とペアを組むことになり、とまどいながら捜査に当たるところがポイントになっている。門脇の視点から描かれている部分が多いので、門脇から見た塔子の振る舞いということになる。

都内の廃屋の中に置かれた檻の中で全裸で殺されているのが発見された事件に駆り出される。腹部に銃弾を打ち込まれたような跡があるのだが、絞殺でもあるようだ。最初は被害者の身許もわからず、糸口が見つからない。そうしているうちに「付近の廃屋を調べるように…」という不明朗な通報電話があり、塔子たちは第二の事件現場に出くわすことになる。そこから少しづつ関係者が浮かび上がってきて捜査が前進しはじめる。前半は、塔子と門脇のペア作りに力点が置かれていて、後半に事件の中身というか、犯人の生育過程に結び付いた行動の背景に描写が移っていくように感じられる。「魔弾」が何かにも仕掛けが待っている。